

田近陽郎效績取調書

取調書

大分縣直入郡竹田所
故田近陽一郎

豊後國岡藩士ニシテ代々禄三百石ヲ食ム父ハ
儀右エ門天保六年家ニ生ル幼年、時加藤長家
ニ從ヒ文武ヲ講ス長スルニ及ビテ平田篤胤、
學風ヲ欽慕シ先輩小河一敏ノ紹介ヲ以テ其ノ
門ニ入り國學ニ通ルニ至リ私ニ皇室ノ式
微ヲ嘆シ勤王ノ大義ヲ唱道セリ父久ノ初メ岡
藩ハ勤王佐幕ノ二派ニ分レ勤王黨ハ其ノ勢微
弱ニシテ佐幕黨ニ拮抗スル能ハズ藩主中川侯
ハ佐幕黨ノ要スル所トヤリテ未ダ勤王ニ從セ
ズ國老中川式部ハ初ヨリ勤王黨ノ志ヲ嘉ミシ

故田近陽一郎

めくれず

陰陽之カ後援ヲ為セリ勸王黨ノ先輩小河
一敏ハ夙ニ諸國ニ流寓シテ志士ト交通シ又私
ニ陽一郎ヲ介シテ藩内ノ同志ト氣脈ヲ通シ以
テ天下ノ形勢ヲ窺ヘリ
又久ノ初メ薩人は枝柵右工門中山大納言ノ臣
田中河内氏江ルノ人安積五郎秋月ノ人海賀宮
門等陸續来リ會ニ薩藩ノ義舉島津久光上京ノ
事アルニ及ニ形勢頓ニ緊迫シ中川式部ノ宅ニ
於テ會合ニ陽一郎ノ父儀左工門ハ玆ニ子載一
退ノ機會ニ参加セラルヘカラルルヲ切論シ遂
ニ岡藩出兵ノ議ヲ決ス即チ一面ハ人ヲ薩州ニ
遣リテ事誼ニ便シ又人ヲ江戸ニ派シ薩王ヲ説
キテ勸王ノ舉ニ同意セシメ愈ニ義舉ノ際ハ藩

侯及夫人ヲ護衛シテ歸國ナリシトシ又一面ニ
 ハ京阪ノ間ニ先殺シテ地理ヲ偵リ人数上京ノ
 際嚮導ヲラシメントス陽一郎ハ小河一政ニ從
 ヒテ数人ト共ニ京阪ノ地ニ先發スルコトニヤ
 シリ筑前平野次郎々亦來テ同伴ノ時、父久ニ
 年三月十八日ナリ
 以テ一行ノ出衆スルヤ固ヨリ藩主ノ命ヲ待テ
 シニヤナリハ以テ藩廳ニ於テハ七名者ト見
 做シテ放逐ノ處置ヲ為シ其他反對派ヨリハ程
 々無情ノ取扱ヲ受ケタリ然レトモ同志者ノ決
 意ハ別ニ期スルモノナリ存テ今回ノ義舉實
 ニ國家安危ノ繫ハル處ナレハ彼令微勢ナリト
 モ天下ノ諸藩ニ先キテ朝参シ以テ中川家先手
 ヲ蒙ラサルハカラス若シ事成ラスシテ幕難至
 ルニトナラハ晚藩七名ノ徒ト稱シテ自刎ノ果
 ヲ藩主ニ及ハサシモノシテ頑達者流ノ誅讞
 何リ願ハニ足ント意氣甚壯烈ナリキ
 赤間関ニ至リテ同所ノ勤王家白石正一郎ノ宅
 ニ宿シ初メテ薩藩ノ西郷吉之助、村田新八、森山
 新藏等ニ會シ日ナラスシテ大政ニ着シ薩藩ノ
 倉屋敷ナリ越中橋ニ十八番長屋ニ寓居セリ以
 テ二十番長屋ニ寓居スルモノハ田中河内、小
 一列、久留米、真木和泉守一列、備前、藤本、津之助、筑
 前、平野次郎、備中、伊居勘平、江戶、清川八郎、安積五
 郎、秋月海賀、宮門及薩藩ノ七名伊年、田高平等ナ
 リヤ我岡藩ノ一列ハ反對派ヨリハ晚藩トシテ

幕府、届出ラレリト聞クト雖初メ平川式部
ノ郎、會合シテ議ラズ所然國老ノ内許ラ後
々岡藩、先鋒トシテ出衆シタルノハ公
然岡藩ヲ略ヘテ敵ヲ自ラ下ラズ故ヲ以テ同寓
者中自ラ重キヲ為スノ風ナリキ
初メ大阪着ノ上ハ岡藩ノ米屋倉ニ潜マンエト
ヲ釣セシメ留守居ノ吏之ヲ許カズ是レ藩ノ反
對者ヨリ既、小河一政一列去奔、通知ヲ延、
居リシヲ以テナリ以テ薩長兩藩ヨリ交々
招請サレシニ薩州先キナリシヲ以テ之ヲ從ヒ
シナリ

同四月二十三日伏見ニ着陸シ同所ノ薩邸ニ寄
寓ス初メ島津久光上京王事ニ盡スト雖未タ何
等ノ解決セリヌノナク追激ノ徒ハ皆之ヲ憤慨
シ薩藩ノ有志及諸藩ノ浪士建議シテ島津侯ニ
勤王ノ大義ヲ勸メ各之ニ隨從シテ以テ一死盡
忠ヲ謀ラントシ尊ヲ侯ノ勳靜ヲ窺ヒシハ侯ハ
着阪後尋テ上京ニ滞在數日頻リニ姑息詭流布
セラレ甚シヤハ侯カ滞京ノ辞名ヲ浪士鎮制ノ
為ト稱シテ幕府ニ居ラレタリナド風説アリ
シヨリ有志等失望遂ニ即夜暴發ノ議、決シ薩
長先ツ九條殿ニ討入り殿下ヲ要シ奉リテ彼ノ
賊兵ヲ誅シ後ニ追ッテ禁關守薩ヲ陳情セシト
ニ藩ノ有志ヲ始メ田中經猷列士州米藩佐土原
熊本秋月其他諸藩ノ脱藩志士等大阪ヲ脱シテ
上京ス(長洲家老亦手勢ニ百餘人ヲ將テ禁裏守

後、為参朝ノ約アリ。其時我カ岡藩一列ハ此ノ
幕舉ニ関シ去就如何ヲ小河一般ヨリ提議アリ
或ハ曰、我輩折角先矣シテ此ニ在リ何ヲ以テ
痛快ナル一着ヲ他ニ譲ルヘキヤト或ハ曰、此
幕舉ハ固ト浪士等ノ世禄ヲ妻子ヲ利シ身
事ニ當リ身ヲ派シテ以テ報公ヲ謀ル徒ノ為
スヘキコトナリ我輩然ラズ夜令一步ヲ後ル
ム岡藩ノ全カヲ舉ゲテ王事ニ勤メシメント欲
スルニ在リ切ノ大ナランコトヲ希ハ、宜シク
沈黙ヲ守ルヘシト議諸客易ニ纏ラズ終一日
後、四月二十三日ヲ以テ大阪ヲ發シ淀川ヲ
遊リ伏見ニ着陸シ姑ナリ同地寺田屋ニテ浪士
、佐島律藩士ノ為ニ歴伏セラル豫期ノコト全
ク齟齬スルニ至レリ即一敘ヨリ禁裏ヲ護ル志
ニシテ上京セル旨島津侯ニ通セシメ二十四日
朝侯ヨリ使者トシテ高崎左久郎正風ヲ差越
シ果徒ニ喚ビセリリシ嘉シシ尚進レテ少閑
ヲ待テ對面セント、主旨ヲ傳ヘラレ伏見ノ薩
邸ニ滞在スルコトナリナリナリ
以ノ時藩主中川侯偶江戸ヨリ帰國ノ途ニ在リ
ト聞キ君ニ伏見ノ事件ヲ針小棒大ニ風説スル
モノアリテ帰途ニ躊躇ヲ來オンヌ計リ難シト
テ田邊龍作ト共ニ四月二十六日東行シ桑名驛
ニ迎ヘテ面謁ヲ請ヒシ先ニ却テ連ニ帰
藩ニハキ旨ヲ命セラル追テ富田驛ニ到リ僅ニ
用人上伊織ニ面シ京伏ノ實狀ヲ述リ引還ニ是

所大雲院ニ移轉セリ

同年八月京都滞在申白川神祇伯資訓王御目見
御付ケニレ御盃頂戴ス

京都滞在ニ案外永キ費用不足ヲ告グルル時

ニ當リ父儀左衛門ヨリ金百兩送付セラルモ慈愛
ノ厚恩ニ感泣スル共ニ家計ノ困難ニ陷ラシ

コトヲ深ク憂ヘ亮ス之ヲ使用セカリキ又岩倉
具親卿ヨリ一封ノ金ヲ賜ハル是ハ國事ニ盡力

ノ切當ヲ讀ミ給ヒ主上ノ玉手ヲ觸レ給ヒシ
御金ヲレハトラ包紙ノ儘下渡カハ披キ見レハ

新小判ニ十枚アリ之ヲ一列ノ者ニ分配シ陽一
郎ハ父ノ送り来リシ金ト共ニ久シク秘藏セシ

カ後年師家(平田篤胤)ニ於テ古史傳上本ノ譽ア

リト聞キ私金ヲ合セ足シテ其費用中ニ寄贈セ
リ然ハ恩賜ノ深ク廣ク同學同門ニ分シカ為ノ

微志ニ外ナラズ

頃日藩主平川侯ヨリ一列ノ者召還ノ内命頻リ
ニ至ルト雖驚ニ島津侯ヨリ内奏ヲ往テ滞京ス

ルモノナレハ今ハ私ニ歸國スルヲ得ヌ而モ方
今朝家守護ノ者一人ヨリトモ歸國スルトキハ

皇威ニ関スル嫌アルコトナラス岡藩ノ瑕瑾
トモナレハ歸國ノ命ニ遵フコト能ハストヲ野

満度虎ヲ私ニ歸國セシメテ藩主ニ此旨ヲ内申
シ尚天下ノ形勢日々ニ幕府ニ非ナルモノアル

ヲ論シテ連ニ全藩ノ本隊ヲ上京セシメラハシ
コトヲ開陳セシメ例ノ頑迷ノ徒之ヲ遮リテ面

謁ヲ許シレテ而モ帰國ノ嚴命ハ依然トシテ止
マサリキ小河一般ハ思フ由アリトテ以テ事ヲ其
筋ニ内申セシカ閏八月二十一日朝廷ヨリ帰國
ヲ差許サレ左ノ通敎感狀ヲ賜ハル依テ同二十
三日京都祭足九月五日岡へ帰着セリ

敎感狀寫

以テ勅使閑束へ被指下在處 敎慮件々遵奉
相成猶以未有志ノ諸藩一同志ニ一ニ去疾狄
掃攘 皇國ノ御威德相輝 敎慮貴徹候様有
之度候岡藩に於テ小河彌右衛門一列當復以
朱罷登島津三郎勤王ノ忠志に隨從戮力いた
ス居候段被聞召 敎感被思召候事
趣無據譯に付可任所意尚御用ノ筋可相忠節

候右ハ藩主忠誠ノ志有之儀且平常政事行届士
風教諭宜敷故ト頼敷 敎感被思召候事

中川修理太史家来

小河彌右衛門
田近陽一郎
樋口勝三助
森國彦
渡邊彦左衛門
田邊龍作
廣瀬友之允
福原武三郎
矢野勘三郎

中川式部家来

宇野関造

野溝甚四郎

赤座彌太郎

堀謙之助

夏目淳平

安野藤次郎

高野直右衛門

高崎善右衛門

敷感状ハ陽明家(近衛殿)於テ議奏中山大納言
忠能卿正親町三條權大納言實愛卿宮野宰相中
將定切卿ヨリ島津侯ヲ經テ小河一敏ニ下渡サ
レタリトゾ
一列ノ者ハ既ニ敷感状ヲ持持セシテ以テ歸國

スルトモ奸吏等ノ一指ヲ添ヒルコトヲ得スト
思ヒキヤ九月三日ニ至リ父儀在工門思召ノ儀
有之隱居被仰付候ニ自家督無相遠三百石被成
下格式高身役仲間一統ノ御番被仰付ノ命アリ
是レ子ノ罪父ニ及ホシタムモノニシテ又城代
ノ嫡子ハ近習物頭トナルヲ例トスルヲ四等殿
ニテ高身役トシ以テ刑ニ代ヘラレタムナルハ
ニ初メ一行カ歸國ノ時三佐港着船ノ夜藩主幕
府ノ命ニ依リ江戸出府ノ期迫シル由ヲ聞キテ
一同驚愕措リ所ヲ知ラス即夜三佐出衆晝夜兼
行圖ニ歸リ諫止ニ努メタレトモ例ノ如ク採用
セラレヌ却テ一列ノ者ニ對シ處罰ヲ行ヒ畏ク
敷感状ハ膺達ナリト臆断シタルハ怕ニ違

憾ノ極ナリキ斯リテ藩主ハ幕府ノ命ヲ遵守シ
テ朝威ヲ憚ラズ薩長土三藩ノ駐屯セシ京改地
方ヲ通過セシトス莫ニ危陰ノオト、謂フヘキ
ナリ果シテ藩主ノ船改地ニ着陸スル頃薩長土
三藩ハ神戸大改伏見大津ノ四ヶ所ニ差押、勢
ヲ配備シテ之ヲ待ツリ然レテ藩主ハ兵庫ニ上
陸スルヤ楠公ノ墓ニ展シテ去ラシ陣間伏在ノ
兵士等ミリ見テ以テ為テテ別ニ多敷ノ護衛兵ヲ
又宰キテ而テ上陸後直ニ楠公ノ墓ヲ斡ス其志
ノ奥床シキ何リ朝敵トシテ之ヲ差押スル思
ヒシヤトテ尾行シテ大改ノ宿所岡藩藏屋敷ニ
来リ薩州岩下佐次士門長州佐々木昌也土州乾
作也後ノ板垣伯等強テ面會ニ青蓮院宮及岡白

殿下ノ命ナリトテ展ニ 敬感ヲ蒙ル岡藩一列
ノ者ヲ藩ニ於テ無新處刑セシ、其ノ意邪邊ニ
存スルヤト詰問セラレ始メテ其ノ臂逃ハテテ
サリシヲ悟ラレ即日熊田陽人小原隼太ヲ京都
ニ走ラセテ兩殿下ニ謝シ尋テ藩主ニ上京セラ
レテ主事ニ勤メテハ、フト、ナリ是ニ於テ始メ
テ一列ノ者カ上ハ國家 皇室ニ對シテ忠誠下
ハ藩主ニ對シテ忠誠ニ共ニ其ノ態度公明ト為
ルニトテ得タリ

文久二年十一月十九日上京ヲ命セシレ出立日
限ハ追テ定ムル旨通達マリ十二月三日出立而
十三日着京同十五日藩主ニ侍シテ関白近衛大
臣ハ参殿去年 敬感ヲ蒙ルハ御禮ヲ述ヘシ

家司近藤式部權少輔より左ノ通り、御ニ渡り

りたり

「先般孰ル上京罷在精忠盡力之段、敎感被為
在候次第於殿下先頼母敷思食候處、歸國之上
於在所表函、閉等之向、有之矣、旨甚以氣之盡
に被思召候然に、以節右答筋等、救免之上為御
禮上京之段、不残御満足に思召候以上、精忠盡
力無怠様心、概可申候尚又、何れ一途の事、に付
對主家愈以忠節丹誠可有之事、思召候、又
高野直左工門義病死之段、扱々御氣之盡に思
召候御主人より、極々冥福等御追修之事に
は可有之、而同志之者より、里敷昂遣候様有
之、度思召候」

同日議奏中山大納言殿野宮宰相殿飛鳥井殿傳
奏河野殿坊城殿ニテ諸王ニ侍シテ參殿セリ十
六日議奏正親所三條權大納言殿ハ參殿セシ
面謁仰付テ左ノ通仰渡サレリ

昨日於關白殿ハ御家司モ以テ被仰下候次第
ニ有王御璽言書ハ唯今修理大夫殿ヨリ致拜
見候何様業々殿下ト承リ奏事ル有之^度上
ハ何分^リ君臣協和一體ニシテ忠誠^モ被盡
候儀肝要之事ニ候歟旨臣數相心得一列之者
ハ此中傳候様有之^度

同日藩王ニ侍シテ青蓮院宮尊猷入道親王ハ參
殿セシニ謁見ヲ許サレ直接左ノ通仰渡サレリ

先達而修理大史格別の存寄を以て各筋寛免
有之趣以上は国内一致にたふす人も輔け共
に可勵精忠候修理太夫に比臺場御用向ふ被
蒙仰然候へは別而之義不教一知ては盡力の
詮に無之迷惑と相成候而不相濟事に候國
元作法の義は此度相守不傷操心を可用可相
國跡を汚而不相成先角一知不教ては不相
成上京之者は勿論在京不教同志の者共へり
以て申述候と申へ得と申示へく候
同月二十三日三條中納言殿へ劄ノ如く参殿ス
二十九日帰國ノ暇ヲ下サレ翌年正月五日ニ出
衆スヘント命アリシハ恰々正月六日將軍上
洛攘夷ノ件ニ決定スヘキ由聞エシヲ以テ再ヒ
滞京ノ命下リ形勢觀察ノ上二月二十五日京都
出衆三月五日歸着セリ三月十八日格式近習物
頭ニ進メシレ且ツ先達而致上京處嚴密候
付以思召錦三杞金三百足被成下、命ヲ受テ鳴
呼同一ノ事ニテ昨ハ罰セリレ今ハ賞セリ天
定リテ人ニ勝ツモノト謂フヘキナリ
同年七月二十六日上京ノ命ヲ蒙リシモ病氣ハ
罹リ且ツ父ハ大病ニ臥スルコトナリ内願
上上京ノ件ヲ免セリ
度應二年九月十二日京都守衛、為組子召連レ
上京ノ命ヲリ十月十五日出衆十一月三日着京
セシカ十一月二十六日ニ至リ病氣再々賜暇ヲ
得テ翌三年正月二十日歸國シ組支配ヲ免シ遠

慮謹慎ヲ命セリ四月三日之ヲ解カハ(當時ハ
病身ノ武士ハ不束者トテ遠慮ヲ命セリ、ヲ
例トセリ)

明治元年十一月十五日猿ヶ辻御警衛数年盡力
不残旨ヲ以テ藩王ノ位階昇進セリ、賜一郎ニ
ハ藩主ヨリ以テ警衛中守衛出京大義満足旨
ヲ以テ酒肴ヲ給ハセリ、タリ

明治元年國學開始ノ議アルヤ同同撤リ命セリ
同年五月開始本學舎司業ヲ命セリ、藩ノ子
弟教導、力ヲ盡セシカ四年正月二十四日病氣
・自學校司業ヲ免セリ

明治六年若狭國若狹度神社權宜司兼少講義同
年豊後國正実寺神社司兼權大講義ニ任セリ

同年依願免本官同年五月御里ナハ愛宕神社
祠官十四年大講義ニ補セリ、同十五年大分縣
官典講究所長ト為リ

同二十一年有栖川宮殿下竹田御滞在、時先年
國年ニ盡力セシ康ヲ以テ特ニ持謁ヲ賜ハシ

同三十年大分縣大分尋常中學校國語科教授ヲ
囑托セシ、竹田分校ニ勤務セシカ三十三年十
月依頼教授囑托ヲ解カシ

同三十八年病ヲ蒙リ歿ス享年六十六著エ所言
堂ノ聚早吸神社考外若千卷アリ

